

「イエスさまの作られた教会です。神の子供として教え学ぶ」
『子供の歌集』48)

イーストンがドイツで初めて出た教会の集会が終わった
ところで。アメリカに住んでいたときに通っていた
教会とはすごくちがうのかなと思いましたが、ほとんど同じ
でした。ただ、ここでは、イヤフォンをして、お話を英語に
通訳してくれるのを聞かなければなりません。
お父さんとお母さんは、後ろにすわっていた家族と話し

はじめました。その家族には、イーストンと同じ年くらいの男
の子がいるようです。

「フィンott家族よ」とお母さんがイーストンに言いま
した。「ジャンマルコは学校であなたと同じクラスよ。」

「やった！」イーストンはジャンマルコに笑いかけました。
ジャンマルコの名前は、英語の「ジョン」と「マーク」を足し
た名前のように聞こえました。「君はどこから来たの？」と
イーストンが聞くと、

教会のためにかたく立つ



トレーシー・カーターと
マリッサ・デニス
ほんとうにあったお話をもとに書
かれました。

イラスト/カラリーゼン

ジャンマルコは、ほほえみ返して答えました。「ぼくたち
はイタリア出身だよ。でも、家族で中国から引っこして来
たばかりなんだ。」

「わあ、すごいね」とイーストン。「ぼく、中国に行ったこ
とないよ。」

次の日、新しい学校に行ったとき、イーストンは少しきん
ちようしていました。でも、教室の向こうでジャンマルコが
手をふっているのを見て、少なくともちゃんと一人は友達が
いてくれると思えました。イーストンのクラスには、世界中
から来ている子供たちがいました。きっとこの学校が好き
になるだろうと思いました。

「おはようございます。」先生がみんなに笑いかけました。
「わたしは、アルバノ先生よ。まず、自分らしさがどうい
う意味か、教えてくれる人はいますか？」

女の子が手を挙げて「自分がどういう人
で何をいちばん大切にしているかということ
です」と答えました。

「そのとおりね」とアルバノ先生。「じゃ
あ、おたがいに知り合いしましょう。みん
なにとって、自分らしいってどんなこと
ですか？ みんなが持っている自分
らしさって何でしょう。」

「わたしはテレビゲームが好きです。」いち
ばん前の列の女の子が言いました。アルバ
ノ先生はにっこりしてしゅみと黒板に書きま
した。「ほかにはどうかしら？」

ジャンマルコが手を挙げて答えました。「ぼくはイタリア
出身です。」アルバノ先生はうなずいて国と書きました。

イーストンは言うことを考えようしました。「ぼくは教会
に行きます」と後ろの席の男の子が言いました。

「それもいい答えね。」イーストンは、「そう言えばよかつ
た」と思いました。

でもだれかが笑い、ほかのたくさんの子たちも笑いま
した。イーストンは、よく分からなくなり、ジャンマルコを見ま
した。ジャンマルコも、こまった顔をしていました。なぜみ
んな笑うのでしょうか。

イーストンは家に帰ると、お母さんに学校であったことを
伝えました。

お母さんは悲しそうな顔をしました。「なぜ教会が大切
かが分からない人もいるのよ。ばかげていると思うのね。」

イーストンは「そうなんだ？」と言いました。教会がばか
げているとは全然思わなかったからです。

2、3週間後、アルバノ先生が生徒たちに、家族らしさにつ
いてお父さんかお母さんと一緒に発表するように言いま

した。
「どんなプロジェクトにする？」夕飯のためにテーブルを
用意しているとき、お母さんが聞きました。

イーストンはクラスのみんなが笑ったことについて考えま
した。「教会のことについて発表したいと思う」とイース
トンが言いました。

お母さんにはにっこりしました。「それはいい考えね。」
「それから、ジャンマルコとフィンott姉妹にもいっしょに
発表してもらえるかな。」

「すごくいいアイデアね。夕飯の後に電話してみるわ。」
次の日、ジャンマルコとフィンott姉妹が来てくれました。
まず、4人で教会についていちばん大切だと思っていること
について話し合いました。お母さんが、出たアイデアを全
部ノートに書いてくれました。それから、ポスター用のポー
ドを見つけて、イエスや預言者や神殿の
写真や絵を見つけてのりではりました。

ついに発表の時がやって来ました。
イーストンはジャンマルコとお母さん
ちと、クラスのみんなの前に立ちました。イーストンは
深く息をすいこむと、

「わたしたちは末日聖徒イエス・キリスト教
会の会員です」と言って発表を始めました。
一人ずつ交替で教会について話し
ました。ジャンマルコは聖文について話し
ました。お母さんは預言者について話
しました。フィンott姉妹は家庭の夕
べについて話しました。イーストンはバプテスマについて話
しました。とってもいい経験になりました。

全部終わってから、イーストンはとても良い気持ちがあ
りました。笑う人はだれもいませんでした。むしろ、みんな
に入ってくれたようでした。イーストンは、とても大切なこと
をクラスのみんなに伝えられてうれしくなつてにっこりしま
した。イーストンは自分が何者であるか知っていました。イ
ーストンは神の子です。■

このお話を書いた人たちは、ドイツ、バーデン・ビュルテンベルク州とア
メリカ合衆国ユタ州に住んでいます。

わたしは神の子です

わたしはイエス・キリストを
信じています

わたしは家族の一員です



神の子供
「みなさんは、自分らしさをどのように見つ
けますか。まず、自分が神の子であることを
覚えてください。」
十二使徒定員会
ラッセル・M・ネルソン会長、
"Identity, Priority, and Blessings,"
Ensign, Aug. 2001, 11